『聖書』にみるユダヤ教徒の生き残り戦略

嶋田　英晴

１．はじめに

ユダヤ人にとって，歴史とはその出来事を通して神が語りかけ，そこで提起された意味に対して人間がいかに反応するかを問われる場であるといえる。そうしたユダヤ人が，神の前に義人となるために最も重視していることは（1），神から与えられたとされる律法の教えを敬虔に守って生きることである。この律法を守るということの直接の現れは，律法の外面的な規律を守って現世における他人との共同生活を正しく維持することに他ならない。このため，ユダヤ教はユダヤ人社会の存在と密接な関わりを持っており，それ無しでは意義を失ってしまう。

では，自らの国家を失って世界中に散らばったディアスポラ（離散）のユダヤ人は，各地の多数派社会の中でいかにして父祖伝来の教えを守り，いかにして今日までいくつもの文明や王朝の盛衰の中を生き残ってきたのであろうか。この疑問に対しては，イギリスの歴史家で文明批評家でもあるトインビー（Arnold Joseph Toynbee）（1889～1975）の「ユダヤ・モデル」（2）が重要な示唆を与えてくれる。それによれば，政治的枠組みたる国家も領土的基盤たる郷土も失ったディアスポラのユダヤ人は，紀元前 586 年（新バビロニアによるユダ王国抹殺の年）以来（3），世界中にディアスポラの共同体（離散体）を形成してその民族としての一体性を維持してきたのである。そしてその一体性の維持は，次のような諸要素によって達成された。

① 個々の離散体がみずからの歴史的一体性を維持しようとの決意を持ち，みずからの統合性と持続性を維持するための手段として，すすんで厳格な宗教的儀式と戒律を遵守する方法を生み出したこと（4）。

② 強固な選民思想の存在が，厳格な戒律を遵守する動機付けとなるとともに，多数派社会への同化を思い止まらせたこと（5）。

③ 多数派社会の宗教を拒否した罰として公的生活から締め出された離散民達が，生き残るために手に入れることの出来る唯一の力として経済力を重視し（6），様々な職業から富を生み出すことに成功したこと。

この「ユダヤ・モデル」からも明らかなように，ディアスポラのユダヤ人にとっては共同体こそが独自の信仰生活を実践できる唯一のユダヤ人社会であり，それのみが彼らの生存の基本単位であった。したがって共同体の存続は彼らの死活問題であり，その存続と発展のために彼らは定住先の諸民族から受ける様々な圧力と格闘した。これは，強固な民族的連帯感というナショナリズム（民族主義）であると言える。一方，ユダヤ人は，彼らの共同体の存続を左右するような歴

史的事件に際しては勿論，平時においても個々の共同体の利害をこえて遠隔の共同体間で相互に協力し合って，多数派の異教徒や異民族の間で生きてきた。これは，一種のインターナショナリズム（国際主義）であると言える。このようにユダヤ人は，ナショナリズムとインターナショナリズムが絡み合った複雑な歴史を営んできたのである。しかし，こうしたユダヤ人の活動は，ホスト社会の活動の中から意識的に区別していかない限り，実際にはユダヤ人がどのような活動をどのような目的で行っていたかはなかなか判別し難い。そこで筆者は,「ユダヤ人による共同体の維持と，生き残りのための諸活動」という点に着目してユダヤ教社会を捉えることとした。ところが，ユダヤ人が離散した期間や範囲はあまりにも広いため，個々の共同体と定住先の多数派社会との関係，及びそれぞれの共同体が直面した問題とその問題に対する対処の仕方は様々であった。したがって各地のユダヤ人が，父祖伝来の教えを子孫に伝えつついかにして困難な歴史を生き抜いてきたかを理解するには，基本的にトインビーの「ユダヤ・モデル」に依拠しながらも，各時代，各地域の特殊性を踏まえた個別的な考察を今後積み重ねていく必要があると思われる。

２．トインビーとゴイテインにみられる民族主義と国際主義

トインビーは，その代表的な著書である『歴史の研究（A Study of History)』において，世界の歴史を，めまぐるしく生滅を繰り返す民族や国家を単位とするのではなく，数百年或いは千年以上の長期間に渡って存在する文明を単位とすることを提唱した。「文明」とは，ある特定の地域の，特定の歴史上の時期における段階の人間社会を意味し，国家より大きく全世界より小さい中間の大きさの人間社会を表す。トインビーによれば，これまで世界史上には 21 或いは 23 の文明があり，それぞれの文明は，発生，成長，衰退の過程をたどるという。こうした歴史の見方を一般に文明史観と呼ぶ（7)。こうした文明による世界史の構成は，必ずしもトインビーの創見ではなく，第一次世界大戦直後に刊行されベストセラーになったシュペングラー（Oswald Spengler）（1880～1936）の『西洋の没落』における着想と似通っている。しかしシュペングラーが，文明（シュペングラーの用語では「高度文化」）を，自己完結的で他者から影響を受けない堅固な統一体，有限の生命を持つ有機体と考えていたのに対して，トインビーの場合は有機体のアナロジーを排しつつ，むしろ文明の影響関係や相互作用を積極的に肯定し，文明相互の継受を親子関係という形で表現した（8)。こうしたトインビーの文明史観については，世間の名声とは裏腹に，総じてアカデミズムの歴史家からは無視と酷評でもって迎えられた。即ちトインビーは，非経験的思弁と体系形成の作業を，直感的な芸術家のやり方で行った「詩人」であって，断じて真の歴史家ではないとされた。当然，トインビーの『歴史の研究』の対象が広く世界史のあらゆる時代，地域，歴史事象に及ぶ以上，特定の分野の専門家である大半の歴史研究者からすれば，トインビーの著作は，自己の専門分野に関わる部分については幼稚な概説の域にとどまり，その他の部分についてはそもそも判断ができない。文明史観の提唱についても，そもそも枠組，用語，概念として学問的厳密さに欠け，またその宗教臭いトインビーの論の進め方にもなじめなかったといえよう（9)。

それにも拘らず筆者が本稿でトインビーを引用するのは，彼が文明の主要なモデルの一つとして「ユダヤ・モデル」を挙げているからである。繰り返すが，ユダヤ・モデルとは，ユダヤ社会のように領土を持たず，宗教的紐帯によってのみ統合がなされ，世界中にその民族が点在しているような社会集団の型を指す。トインビーは，この世界に離散した「ディアスポラ」には，文明論的な役割があるとして重視している。トインビーによれば，あらゆる種類の交通・通信手段における加速度的な改善によって世界が狭くなり，人や物，情報の世界的な移動が活発になればなるほど，領土・国境の意味合いが薄れるため，一定の領土の上にピラミッド型の支配構造を形成する点で「垂直的」な構造を持つ従来の地方的な国民国家に代わって，領土と国家を必ずしも必要とせず「水平的」に限りなく広がりうる社会構造を持つ，（ユダヤ人を典型とする）「ディアスポラ共同体」が，新しい人間の居住条件としてますます注目されることになるという。つまりトインビーは，このディアスポラの創造的・積極的な意味に着眼して，歴史上の「ユダヤ・モデル」を人類史のゆくえを問う「未来の波」として非常に重視しているのである。これは，ある意味でドイッチャー的インターナショナリズム（国際主義）である（10）。

ところで，筆者が専門的に扱う中世イスラーム社会経済史の碩学であるとともに，中世のユダヤ教徒の歴史をも研究した，20 世紀のユダヤ系の学者であるゴイテイン（Shlomo Dov Goitein）（1900-85）によれば，既に中世においてイスラーム圏のユダヤ教徒が多数派のムスリムや同じくその支配下にあったキリスト教徒と平和裏に共生していたという。しかも，ゴイテインの主な研究対象である 11 世紀から 13 世紀半ばのイスラーム圏では，北アフリカとエジプトを結ぶユダヤ教徒の離散共同体間の強力なネットワークを中心に，地中海南岸，東岸，西岸一帯に点在する離散体を拠点とした数多くのユダヤ教徒が，縦横無尽に取り結ぶ巨大なネットワークが存在していたという。ゴイテインは，ユダヤ教徒の離散共同体を地中海的文化伝統の中で生活している多くの「社会」の一つとしてゲニザ文書を用いて（11）詳細に描写し，これを『一つの地中海社会（A Mediterranean Society）』と名付けた。勿論ユダヤ教徒の離散共同体は，同時代の地中海北岸にも多数存在していたことが確認されている（12）が，ゲニザ文書には地中海北岸及びイベリア半島出身のユダヤ教徒が書いた，或いは彼らについて記載したと考えられる史料が極めて少ないことから，記述の中心は北アフリカ，エジプト，地中海東岸となっている。しかし，以上の事柄について考慮したとしても，ゴイテインが地中海全域を視野に入れていたことに変わりは無く，彼の構想は「環地中海世界（社会）」という壮大なものであったと考えることが出来よう。

加えてゴイテインは，元々11 世紀以降のインド洋交易について研究していたのであるが，インド洋交易に従事していたユダヤ教徒の商人の多くが，地中海に基盤を据えた人々であることに気付き，途中から地中海交易の研究を優先させたのであった。その証拠に，地中海におけるユダヤ教社会についての研究を一段落させると，晩年は再びその研究対象をインド洋交易に戻している。その成果は，彼の幾つもの論文によって生前出版されて世に出たが，その総決算とでも言うべきものが，没後出版された『中世のインド洋交易者達（India Traders Of The Middle Ages）（13）』

である。これらの事から，中世のユダヤ教徒の離散共同体の分布は，地中海一帯からインド洋沿岸にまで及んでおり，ゴイテインの視野はそのほぼ全域を覆うものであったということが出来る。つまり，中世のユダヤ教社会を考察することは，未来のインターナショナルな世界を模索する手掛かりとなるといえる。そこで次章では，中世において，広域のユダヤ教徒どうしを結び付けた強力な民族的連帯意識が，ユダヤ教徒が日々読み続けた『(ヘブライ語）聖書』によっていかに育まれたか，を明らかにしたい。

３．『(ヘブライ語）聖書』にみるユダヤ教徒の生き残り戦略

a.聖書時代の古代イスラエル時代から神殿再建まで

どの民族にも通じる事ではあるが,ユダヤ人はとりわけ生存即ち生き残りをかけて努力をする。しかもただ生き残る事のみならず，ユダヤ人としてのアイデンティティーを保持することを重視していることに大きな特徴がある。それはユダヤ人が神と契約を結び，神に選ばれた民として生きることにより，神の意志を地上に実現することを民族の使命と捉えた時以来，彼らが自らに課してきた定めであったと言える。

しかし，自らの価値観を最優先し安易な妥協を拒んで強力な周辺諸国あるいは多数派の異教徒への同化を潔しとしないその姿勢は，周辺諸国やホスト社会との間に幾つもの軋轢を生じ，最悪の場合は生命を奪われたり，民族の絶滅を企図されるほどの事態を招来してきた。にもかかわらず古代から現代に至るまで彼等が絶滅せずに生き残ることに成功してきた背景には，他の民族には思いも及ばないような生き残りのための戦略や戦術を発想，もしくは模倣し，それらを最大限効果的に実行してきた事実があったと推察される。

筆者の今後の課題は，古今東西のユダヤ人が直面した，彼等の生存を脅かす様々な危機を克服するために採られた様々な戦術を抽出し，具体的歴史的状況においていかなる方法が用いられたかを調査することによって，ユダヤ人の生き残りのための戦略を明らかにして行くことである。そして，成功例のみならず失敗例など事例を拡大して，その全貌を明らかにすることにより，より普遍的な理論を構築することが最終的な目標であり，その成果は，将来ユダヤ人と同じような状況に置かれる可能性のある集団が生き残るために採るべき戦術ないし戦略を提供するに際して有益であると考える。したがって，これから，ユダヤ人が最も重視している『(ヘブライ語）聖書』（配列は異なるがほぼ『旧約聖書』に相当）の記述から，ユダヤ人が，神とどのような関わりを持ったと考え，なぜユダヤ人としてのアイデンティティーを維持しながら必死に生き残りに努めるに至ったか，その原因と経緯を明らかにしていく。

ユダヤ人の信じる『ヘブライ語聖書』によれば，ユダヤ人を含むイスラエル民族の祖はアブラハムである。「創世記」において，彼は一方的に神によって召命され（選ばれ），神の示す地へ移住することを命ぜられた（創 12:1-3）。神は，彼を飢饉によりエジプトへ移住させたり（創 12:10-20），彼が百歳になって漸く生まれた息子のイサクを自らに対する犠牲として捧げさせようとするなどして（創 22:1-18）何度もその信仰を試みた。そしてあらゆる試みに悉く応えた彼との間に契約を結び，彼を祝福してその子孫を大いに増やすこと，及び彼とその子孫に永久にカナ

ンの地を与えることを約束した。アブラハムの例が示しているのは，神による個人の「選び」である。「選び」とは，神が集団の中から特定のグループまたは個人を，御自身の業をなすという目的のために選ぶことを指す。この「選ぶ」という単語は，ヘブライ語でבחר「バーハル」という動詞が用いられるが，これは，注意深く考慮した後，人や物を意識的に選択することを意味するという(14)。同様に，神はアブラハムの息子イサクとの間にも同じ内容の契約を結んだ(創 26:24)。ところが，これまで全能性を主張していた神であったが，イサクの子ヤコブとの関係においてその立場に変化が生じる。ヤコブは兄エサウから長子権を奪ったのみならず（創 25:29-34)，父を騙してその祝福を得た（創 27:1-45)。さらに，彼は後に神と格闘し，勝利するやいなや，神による祝福を求めた。そして，神から祝福を授かっただけでなく，最早ヤコブではなくイスラエルと改名するよう告げられた（創 32:28)。「イスラエル」とは，「神と人と争い，これを克服する者」（“Vayomer lo Ya'akov ye'amer od shimcha ki **im**-Yisra'el ki-**sarita im-Elohim ve'im** anashim vatuchal. ” (Genesis.32:28)。“Then the man said, your name will no longer be Jacob, but Israel, because you have struggled with God and with men and have overcome”）という意味を表すが，ここにおいて神はイスラエルと同等または格下の立場に立たされた。この部分の記述は，聖書でも昔から謎めいた内容を記した個所とされ，様々な解釈を生んできた。しかし，後に神は改めて全能者としてイスラエルに臨み，彼と契約を結び，彼を祝福し，カナンの地を彼とその子孫に与えることを約束した（創 35:9-12)。そしてそのイスラエルの息子達がイスラエル十二部族の祖となったのである。

神による「選び」には，アブラハムの場合のような「個人の選び」の他に，「集団の選び」がある。「選び」は聖書を貫く重要な思想として「契約」と密接に関連し，ユダヤ人によれば，契約の民イスラエル十二部族こそが「選ばれた民」であるとされる（申 7:6, 詩 105:6, 135:4, イザ 41:8-9, 44:1)。「選び」とは，特定の人々または民族が他と区別して扱われ，特に神の恵みに与り，使命を与えられることをいう。後で述べるように，イスラエルが選ばれたのは，彼らが優れていたからでなく（申 9:4，6)，数が多かったからでもなく（申 7:7)，全く神の恵みによることであった。しかし，選びの目的は自らが特権を与えられることではなく，他のすべての者に祝福を分け，道を示すことである（創 12:3，イザ 42:1，43:10)。「選び」は神の恵みであるから感謝して励み，責任と使命を果たさねばならない。元来「選び」は救いを内容とし，義とし，清めるものであるから（申 7:8，10:15，イザ 44:21-22)，その救いにふさわしいあり方が求められる(15)。

ここで，生き残り戦略を考える上で非常に重要な事例がある。それは，イスラエルの子の一人であるヨセフの，兄達によるエジプトへの追放である。ヨセフはイスラエルに最も愛された故に他の兄弟達から妬まれ，奴隷としてエジプトへ売られるが，紆余曲折を経てそこで宰相となり，やがて飢饉に苦しんでエジプトへやって来た兄弟達を救うことになる（創 37-50)。この「ヨセフ物語」では，中心的部分に「残りの者」の思想が見られる（創 45:4b-8a)。そこでは，ヨセフ自身が自らを，危機から家族を救う「残りの者」であると兄弟たちに語りかけている。他の兄達によるヨセフの追放は，将来の飢饉を予見してのことではなかったのに加えて，追放先でヨセフが必ず成功を納める保証はどこにも無かった。しかしこれは，一族全員が同じ場所に留まり，飢饉をはじめとする様々な危機に対処することが出来ずに全滅してしまう危険性を回避，もしくはせ

めて少しでも軽減する可能性を帯びていたことを示す典型的な事例といえる。また，これは聖書における「残りの者」の概念を具現化した非常に重要な事例の一つである。「残りの者」の典型的な用語としては，שאר「シャーアル」（残る）という動詞，およびその変化した「シュエリート」（残りの者）で表現されている聖書における重要な概念の一つである（16）。

やがて時を経て，イスラエルの民がエジプトで奴隷となり，神に救いを求めるにおよび，これに応えるべくモーセが神によって召命された（選ばれた）。これも，神によるモーセ「個人の選び」である（出 3:1-10）。この際，モーセに対する神の立場は絶対的な命令者であり，モーセに対して自らの名前を「エヒイェ　アシェル　エヒイェ」即ち「わたしはあらんとしてある者である」及び「あなた方の先祖の神，アブラハムの神，イサクの神，ヤコブの神，ヤハウェ」と告げる（17）。この時，神はイスラエルの民のエジプトからの解放を約束し，エジプト人の全ての長子が命を落としたのに対して，「過越し」によってイスラエルの民の長子だけが救われて生き残った。やがてエジプトを出て荒野において，神はモーセを介してイスラエルの民に十戒を授け，彼らと契約を結んだ（出 19 等）。

「契約」と訳されているヘブライ語のברית「ベリート」という語の意味については諸説あり，「決定する」とか「規定する」という意味が提案されている。「契約を結ぶ」という場合，כרת「カーラト」（切る）という動詞が使われるが，これは契約を保証するために犠牲の動物を切り裂いた儀式に由来する（創 15:10 参照）。契約は一般に対人関係における約束に用いられるが，聖書において重要なのは，神とイスラエルの民との関係についてである。契約には，神の側から一方的に与えられた恩恵の場合と，相手にも義務を要求する場合の二つがある。時代は遡るが，前者の例としてはまず「ノアの契約」が挙げられる。ノアの方舟の物語は，一神教の信者のみならず世界中に類似の物語が存在する。すなわち「神はノアと彼の息子たちに言われた。『わたしは，あなたたちと，そして後に続く子孫と，契約を立てる。あなたたちと共にいるすべての生き物，またあなたたちと共にいる鳥や家畜や地のすべての獣など，方舟から出たすべてのもののみならず，地のすべての獣と契約を立てる。わたしがあなたたちと契約を立てたならば，二度と洪水によって肉なるものがことごとく滅ぼされることはなく，洪水が起こって地を滅ぼすことも決してない』」（創 9:8-11）とあり，神の側の一方的な約束だけでノアの側の義務については言われていない。さらに，契約が神の側から一方的に与えられた恩恵の場合の例として神とアブラハムとの関係が挙げられる。神はアブラハムと契約を結び，カナンの地を与え（創 15:18），「わたしは，あなたとの間にわたしの契約を立て，あなたをますます増やすであろう」（創 17:2）と約束された。これに対して，契約が相手にも義務を要求する場合の例として，モーセを介した，神とイスラエルの民との間に結ばれた「シナイ契約」が挙げられる。すなわちシナイ山で契約が結ばれた時，民の側は「わたしたちは神の言うことはみな実行し聞き従う」と約束している。これはイスラエルをエジプトの国，奴隷の家から導き出したヤハウェがイスラエルの神となり，イスラエルがヤハウェの民となるという契約である。そしてこれにはイスラエルは，十戒をはじめとして神によって与えられた戒めを守ることが義務づけられているのである（18）。この，モーセを介した，神とイスラエルの民との契約の締結により，神によるイスラエルの民の聖別が行わ

れて選民思想が発生し，イスラエル民族の自覚が生まれる。神によるイスラエルの民の選びは，神によるアブラハムの「選び」や，祭司アロンの孫で，エルアザルの子であるピネハスに関して，彼自身とそれに続く彼の子孫が，神との間で永遠の祭司職に与かった「個人の選び」（民　25:1-18）に対して，神による「集団の選び」を代表する典型的な例である。

シナイの荒野で四十年間の時を過ごしたイスラエルの民は，モーセから後継者と認められたヨシュアの下でいよいよカナンの地へと侵入することになる。この時の神とイスラエルの民との関係であるが，神は相変わらず絶対者であり，イスラエルの民の助け手である。イスラエルの民は神の助力の下，カナンの地に侵入して生存地を確保することに成功し，ここにアブラハム以来の，カナンの地を賦与するという，神との契約が一部成就する。カナンの地へ入ったイスラエルの民は，士師の下でカナンの地に住む諸民族との闘争を繰り広げながら次第に領土を広げていく。しかし，イスラエルの民は，苦境にある時こそ唯一神に縋るが，一度平穏が訪れるとその神を忘れ，人々の間における神の比重が低下した。この時代，イスラエルの民を指導していたのはカリスマ指導者達であるが，神の異民族利用によるイスラエルの民へのけしかけによって彼らは神の力を再認識し，士師と共に諸民族と戦った。

やがて，イスラエルの民の要望に応える形で神が王政を容認し，預言者サムエルを介してベニヤミン族出身のサウルが初代の王に任命された。サウルは当初幾度も諸民族との戦に勝利するが，神の命令に背いたことから神に見放される。サウルに代わって神の意思の下に預言者サムエルが選んだのがユダ族出身のダビデである。これは，神による「個人の選び」の一つである（サム上 16:1-13）。ダビデは，サウルの嫉妬に苦しみながらも最終的には王となり，七年半の間ヘブロンで治めた後，エブス（後のエルサレム）を攻略してこの町から全土を治めるようになった。エルサレムで治めるようになってからも，ダビデは幾度も異民族との戦に勝利し，神がイスラエルの民に約束していたカナンの土地の全てを手に入れ，神のイスラエルの民に対する約束がダビデの下で成就した。この，神とダビデの間に結ばれたのは，神が相手にも義務を要求する契約である。それを示すように，ダビデの家が永遠に続くという「ダビデ契約」（サム下 7:16）も，戒めを守ることが条件となっていた（19）。ダビデはエルサレムに神の契約の箱を運び込み，さらにそれを安置する神殿を建設しようと望むが，その望みは彼の治世下では達成されなかった。ダビデの後，王位を継いだのは，兄弟同士の熾烈な権力闘争を勝ち抜いたソロモンであった。ソロモンは王位に就くと神の「契約の箱」を安置する壮麗な神殿をエルサレムに建設し，その治世の下で古代イスラエル王国は繁栄を極めた。しかし，やがてソロモンは異教徒の女性を多く娶り，その影響で異教の神や偶像崇拝に耽るようになった。そして，ソロモンが没すると古代イスラエル王国は，北のイスラエル王国とダビデ家の血統が統治する南のユダ王国に分裂した。

分裂後の北のイスラエル王国では，唯一神に立ち返るよう促す預言者達による警告にも拘らず，王を始めとする国民によって唯一神が蔑ろにされ，やがて政情が不安定化した。こうした中，ヤハウェ信仰とバアル神信仰の対決を物語る（王上 17 章）以下において，「残りの者」は迫害のただ中にありつつもヤハウェ信仰を貫いた人々を指しており，バアルにひざをかがめず，それに口づけしない「7 千人」をヤハウェは「残される」（王上 19:18）とされた。しかし，イスラエルは

神によって与えられた戒めを守ることにおいて完全に失敗した。これはイスラエルの側の契約破棄を意味した。そこで神は預言者を通して,「あなたたちはわたしの民ではない」と宣告した（ホセ 1:9)。そしてやがて，北のイスラエル王国はアッシリアによって滅ぼされた。ここに，生き残り戦略失敗の例を確認することができる。これに先立ち，イザヤの「召命記事」においては，聖なる神による裁きが強調されるが，しかし最後に「それでもその切り株は残る。その切り株とは聖なる種子である（イザ 6:13）と記されている（20)。また，イザヤの息子は「シェアル・ヤシュブ」というシンボリックな名を付けられている。その意味は,「残りの者は立ち帰る」であり，それは「残りの者が帰ってくる。ヤコブの残りの者が，力ある神に。あなたの民イスラエルが海の砂のようであっても，そのうちの残りの者だけが帰ってくる。滅びは定められ，正義がみなぎる。万軍の主なる神が，定められた滅びを全世界のただ中で行われるからだ」（イザ 10:21-23）において現実に関する声明として繰り返されている。「残りの者」とは，神の道から離れた結果として人々を襲う大災害を生きのびた信仰心の篤い者により，イスラエルの未来が保証されるとする信条を意味する用語である。イザヤにおいて,「残りの者」の教義は最も発展した形で見受けられ，未来についてのイスラエル（の民の）思想に非常に重大な影響を及ぼした（21)。

一方，南のユダ王国では唯一神を崇拝する王と異教の神に傾倒する王が輩出したが，アッシリアによる攻撃には何とか持ち応えた。民を導く神の臨在の象徴として用いられてきた「契約の箱」は，以前にダビデによってエルサレムに移されて天幕の中に安置され，その子ソロモンは神殿を建築した際に，それを至聖所のケルビムの翼の下に安置していた。その後，南のユダ王国の王ヨシヤの宗教改革の時に,「契約の箱」は聖所に再び安置された。しかし，ユダ王国もやがて新バビロニアによって滅ぼされ，神殿が崩壊しエルサレムも破壊され尽くした。王族を中心とする上層の人々はバビロニアに連行され（「バビロン捕囚」)，こうして預言者エレミアを通した神の言葉が成就した。

しかし，神はイスラエルを見捨ててはいなかった。やがて新バビロニアを滅ぼしたペルシャ王キュロスにより，バビロニアからパレスチナへの帰還が許され，早速エルサレムでの神殿の再建が開始された。エルサレムの第二神殿が再建された後，エズラがバビロニアからエルサレムに派遣され，律法的ユダヤ教を確立することにより改革運動を開始し，衰退していたイスラエルの宗教を復興させた。また，その後ネヘミアがペルシャからエルサレムに派遣され，城壁を再建した。そして，エズラによるトーラー朗読が為され，ユダの民の悔い改めが行われた。

b.ヘレニズム時代におけるユダヤ人の生き残り闘争

やがてアレクサンドロス大王がパレスチナを征服し，その後プトレマイオス朝によるパレスチナ支配が始まり，続いてセレウコス朝が支配者となった（一マカ 1:1-9)。しかし，セレウコス朝のアンティオコス 4 世エピファネスがユダヤ人を迫害し，ヘレニズム化を強制したため（一マカ 1:10-2:70)，マカベアのユダが反乱を起こし，ハスモン家がエルサレム奪回に成功した。マカベアのユダはエルサレムの神殿を清めたが，これが「ハヌカー祭」の起源となっている（一マカ 3-4)。やがてハスモン家のヨナタンがセレウコス朝によって大祭司として認められるが，ヨナタンは暗殺されシモンが大祭司となる（一マカ 13)。その後シモンがセレウコス朝から独立し，ハスモン

朝を創始する。紀元前 2 世紀末にはアレクサンドロス・ヤンナイオスの治世の下でハスモン朝が最盛期を迎える。

c.ローマ時代におけるユダヤ人の生き残り闘争

前 64 年にはローマ帝国がセレウコス朝を滅ぼし，ハスモン家の後継者争いに介入してきた。翌年ローマはエルサレムを占領し，パレスチナを支配するとともに，ハスモン家を王位から降格させた。そしてローマに上手く取り入ったヘロデがガリラヤ知事に任命され，一時アンティゴノス・マタティアがパルティアによって王と大祭司に任命され，ハスモン朝を再興するが，ローマ元老院はヘロデをユダヤ王に任命した。そして，ヘロデはローマ軍の支援の下パルティアからエルサレムを奪回して王朝を樹立した。やがてヘロデが没すると，ヘロデ家の統治権が廃位され，ユダヤはローマの属州とされた。この頃ユダヤではローマの圧制から開放してくれる救世主の到来が強く待望された。紀元 66 年にはカエサリアでのユダヤ人迫害を契機にユダヤ人による対ローマ戦争が勃発し，激しい戦闘の末 70 年にローマ軍によってエルサレムの第二神殿が破壊された。

d.第二神殿崩壊からラビ・ユダヤ教の成立へ

第二神殿崩壊の頃，ヨハナン・ベン・ザッカイがヤブネにおいてユダヤ人共同体を再建し，ユダヤの教えが命脈を保つ道が開かれた。対ローマ戦争は 73 年にマサダの要塞が陥落し，ユダヤの敗北をもって終結した。ヤブネにおいては，ヘブライ語聖書の正典化が進み，ユダヤ教はラビの称号を持つ賢者が台頭して，口伝律法の整備及び祈りや学習の場所としてのシナゴーグの利用が顕著となった。しかし，ローマに対する不満は収束していたわけではなく，アレクサンドリアなどでローマに対するユダヤ人の反乱が起こり，ついに 132 年にバル・コフバによる（第二次）対ローマ戦争が勃発した。この時，バル・コフバを救世主（メシア）と宣言したラビ・アキバは殉教し，反乱鎮圧後，エルサレムは「アエリア・カピトリーナ」と改称され，ユダヤ人の出入りが禁止された。加えて 135 年ローマ皇帝ハドリアヌスがユダヤ人を迫害し，多くの学者がバビロニアに移住した。しかし，これを機にユダヤ人が「離散の民」となったと言うことは正しいだろうか。というのも，当時の全世界のユダヤ人の半数から三分の二は，既にこれ以前からエレツ・イスラエル（イスラエルの地）以外の各地に分散して居住していたからである。正確には，これにより，むしろユダヤ人の「離散」（ゴーラー）が固定化したというべきであろう。既に神殿を失い，聖地であるエレツ・イスラエルまで喪失してしまったユダヤ人は，これ等の事件の背後にある意味，即ち神の意図を模索し，それと照らし合わせて自らの態度を反省せざるを得なかったことであろう。

４.『聖書』におけるユダヤ教徒の生き残り戦略のまとめ

以上，ユダヤ人（イスラエルの民）の起源から民族の離散が本格化するまでの経緯について聖書の記述を中心に概観してきた。ディアスポラのユダヤ人は皆この経緯を自分達の歴史として共有してきた。即ち，自分達の先祖であるアブラハム，イサク，ヤコブが唯一神と契約を結ぶこと

によって，神の祝福を受け，子孫の繁栄が約束され，カナンの地を永久に与えられるという内容である。そしてモーセを介して，神との契約がイスラエルの民の構成員全てとの間で交わされるに至ったと信じた。しかし，その後彼らはしばしば唯一神への敬神の念を忘れ，安易に偶像や異教の神を崇拝した。これに対して，神は異民族に働きかけてイスラエルの民を苦難に陥れ，生き残るために最も重要なことは唯一神に立ち返ることであると，預言者達を通じて悟らせようとしたのだ，と解した。そのことが最も明確に認識されたのが，背神行為に耽っていた北イスラエル王国の，アッシリアによる滅亡であり，新バビロニアによるユダ王国の滅亡であった。これを受けて，バビロン捕囚からの帰還以降，特にエズラによる改革運動を経て，ユダヤ人の間で反省の念が高まり，神によって与えられたとする戒めの厳守を尊ぶ風潮が高まった。つまり，捕囚後の教団は自らを「残りの者」と理解して，その再生を目指した（ゼカ 8:6，11 等）のである。今や，戒律を守ることは神との契約の履行と同義語であった。神と契約を交わした「選民」であるユダヤ人は,神から与えられたとする戒律を厳守すべきであるという考えは,その後のタルムード期,即ち口伝律法が形成されていく過程においてラビ達の指導の下で益々強化されてゆき，神の意志を地上において実現する「選民」であるユダヤ人にとっての非常に重要な務めとなっていった。つまり，ユダヤ人は，神と契約を交わしたことによって自らが神の「選民」となったとみなし，「選民」としての義務は神によって与えられたとする戒律を守ることであり，戒律を厳守している限り，神の意志を地上に実現することに加担しており，地上のどこにあっても生き残ることができるという確信の下，心を安らかにして日々の生活を営むことが出来たのであった。そして，やがて世界に「終末」が訪れた時，ディアスポラのユダヤ人は聖地に集い，最後の審判において神によって公正に裁かれると考えたのであった。従って,その時までユダヤ人がなすべきことは,聖書に「生めよ，ふえよ，地に満ちよ，地を従わせよ。」（創 1:28）とあるごとく，子孫を生み,彼らに神の「選民」たるユダヤ人としての自覚を植え付けて育て，それによってユダヤの教えを後世に伝えることであった。このことこそが，ユダヤ人が自らのアイデンティティーに人一倍こだわりつつ,「残りの者」として生き残ることに執着する所以であったと考えられる。しかし，既に述べたが，選びの目的は，自らが特権を与えられることではなく，他のすべての者に祝福を分け，道を示すことである。従って，これを間違えると「選民」もその資格を失う（ロマ 9:6-8）のである。

５．むすび

本稿で確認してきたように，ユダヤ人の聖典である『聖書』には，彼らの民族的連帯を強化するために作用する要素が満ち満ちている。この『聖書』を日々繰り返して読むユダヤ人は，否応なくその固有の民族性を自覚させられる。さらに，ユダヤ人のもう一つの聖典である口伝律法タルムードが編纂され，浸透していく過程においても，その傾向は益々強化される一方であった。こうしてユダヤ人のナショナリズムは日々強化されたが,離散という,その特殊な居住形態故に,彼らのインターナショナリズムが開花する機会も度々訪れたのである。筆者は，このような性格を宿命づけられたユダヤ人について，古代から現代に至るまでの歴史に基づき，彼らが直面した対立およびその対立への対処法（戦術乃至戦略）を今後整理してみたい。ところで，筆者が普段

扱うのは，中世イスラーム圏（アラビア語圏であり，ペルシャ語圏及びトルコ語圏については範囲外である）のユダヤ教徒の生き残り戦略である。中世イスラーム圏においては，一般的にユダヤ教は共生のための障害とはならなかった。いわゆる「イスラームの寛容」の下，ユダヤ教徒は経済活動や学問の分野で大いに活躍した。しかし，イスラーム圏においても，迫害や強制改宗が皆無であった訳ではない。こうした場合，一般的にユダヤ教徒はイスラームに改宗したり，移住するなどして凌いだ。それは，改宗を拒んで殺害されてしまえば神との契約を果たせなくなるからであり，生きてさえいれば，やがて再びユダヤ教に改宗する可能性があるかもしれないからである。また，移住に関して言えば，ユダヤ教徒にとって離散状態は神による罰であるという（主にキリスト教側からの）見解もあるが，むしろ民族の生き残りにとって好都合であったと考えることも可能ではないであろうか。それは，何らかの理由で，ある地域の共同体が危険に晒され衰退なり消滅しても，他の地域の共同体に移住するなどして巧みに世界情勢に適応していくことが出来たからである。その典型的な例がスファラディ系ユダヤ人のスペイン追放である。ユダヤ人のこの移住一つとってみても，当時及びその後の世界に与えた影響は計り知れない。

註

（1）ユダヤ教では，有限な人間は相対を絶する無限な神にはなれないと考えるので，せめて義人として神に近づくことを目指す。

（2）トインビー，A.『図説・歴史の研究』（桑原武夫訳）学研，1975 年，pp.74-80.「ユダヤ・モデル」の項参照。

（3）この年，バビロニアに連行（「バビロン捕囚」）された多くの捕虜やその子孫はアケメネス朝の下で故土への帰還を許された（紀元前 538 年）。しかし，既にバビロニアに基盤を据えていた富裕層の多くは，その後も留まって離散体を維持し続けた。

（4）宗教的儀式や掟の厳格さ故に，ユダヤ教はしばしば律法の宗教と思われがちである。実際，ユダヤ教には守るべき 613 もの戒律がある。しかし，そうした律法戒律の根底にある本来の精神は，謙虚さと人間愛と敬神の三点なのであって，権威に盲従してその意味を杓子定規に解釈し，その一点一画を墨守すれば信仰生活を全うできるとする考え方はユダヤ教にとって異質なものである。要するにユダヤ教は，神の指図は未来のよき可能性に向かって開かれているという信仰の下，その指図を示すために神が人間に与えたとされるトーラーの掟を行動の指針として重んじるのである。

（5）ユダヤの選民思想はしばしば誤解されがちで，普通は，自分達だけが神に選ばれた聖なる民であるというユダヤ教徒の思い上がりや高慢な矜持として理解されがちである。実際，戒律の遵守に安んじ，自分の宗教の優越性に陶酔して尊大な言動をとる安易な信者はユダヤ教に限らずどこの宗教にも見受けられる。しかし，ユダヤ教の選民思想の意味は，神がイスラエルの民を愛してこれを救済へ導くという点だけでは方手落ちである。神との契約に基づき，ユダヤ教徒自身も神の同労者としての使命を命がけで果たすべく努める義務を

負っているのである。

（６）この点については，ウェーバー（Max Weber）（1864～1920）も「民族上或いは宗教上での少数者は，（被支配者）として他の（支配者）たる集団と対立するような地位におかれている場合には，自発的にか或いは他動的にか政治上有力な地位から閉め出された結果として別していちじるしく営利生活の方向に進むことになるのが常であり，彼らのうち才能に秀でたものは，政治的舞台で発揮することのできない名誉欲をこの方面で満たそうというのである。」と同様の指摘をした上で，そうした少数派の例としてロシアや東プロイセン地方のポーランド人，ルイ 14 世時代のフランスにおけるユグノー，イギリスにおける非国教派やクェイカー教徒，そして最も顕著なものとして二千年この方のユダヤ人を挙げている。（マックス・ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神　上巻』梶山力・大塚久雄訳，岩波文庫，1955 年，pp.22-23.）

（７）『歴史学事典』・第 5 巻　歴史家とその作品，学研，1997 年，p.353.

（８）『20 世紀の歴史家たち』・第 3 巻，世界編上，刀水歴史全書 45，pp.128-129.

（９）同上書，pp.129-130.

（10）この節は，吉澤五郎「トインビーの文明批評――地球文明の道標として――」『宗教と文化 18』聖心女子大学キリスト教文化研究所，1997年，に多くを負っている。また，ドイッチャー的インターナショナリズム（国際主義）については，彼の『非ユダヤ的ユダヤ人』において一貫して追求される主題である。

（11）ゲニザ文書については，本稿補遺を参照。

（12）12世紀後半の地中海北岸各地のユダヤ教徒共同体については，『トゥデラのベンヤミンの旅行記（Sefer ha-Massa‘ ot）』に，詳細な情報が記載されている。

（13）S.D.Goitein & Mordechai A. Friedman, India Traders Of The Middle Ages, Leiden,2008.

（14）「選び」の項，『聖書事典・新共同訳』日本キリスト教団出版局，2004年，pp.158-159.

（15）「選び」の項，『聖書事典・新共同訳』同上書，p.159.

（16）「残りの者」の項，同上書，p.474.

（17）モーセに告げられた神の二つの名前について，詳細に解説したものとしては，市川裕『ユダヤ教の精神構造』東京大学出版会，2004年，pp.326-332を参照。

（18）「契約」の項，『聖書事典・新共同訳』同上書，p.250.

（19）同上

（20）「残りの者」の項，同上書，pp.474-475.

（21）‘REMNANT OF ISRAEL’, Encyclopaedia Judaica, 2nd ed., vol.17, Jerusalem, 2007, p.217.

参考文献

Abulafia, D.　*Commerce and Conquest in the Mediterranean, 1100-1500.*

Great Britain, 1993
Arberry, A.J. *Religion in the Middle East*. Vol.1, Cambridge, 1969
Ashtor, E. *A Social and Economic History of the Near East in the Middle Ages*. London,1976, 384pp.
idem, *Studies on the Levantine Trade in the Middle Ages*. London, 1978
idem, *The Jews and the Mediterranean Economy 10th-15th centuries*. London, 1983
Cohen, A. *Jewish Life Under Islam*. London, 1984
Cohen, M.R. *Under Crescent & Cross*. Princeton, 1994
Curtin, P.D. *Cross-cultural trade in world history*. Cambridge, 1984
Cutler, A.H. *The Jews as Ally of the Muslim*. Indiana, 1986
Gerber, J. *The Jews of Spain*. New York, 1992
Goitein, S.D. *Jews and Arabs*. New York, 1955
idem, *Studies in Islamic History and Institutions*. Leiden, 1966
idem, *A Mediterranean Society*. 6Vols. Berkeley-Los Angels, 1967-93
idem, *Letters of Medieval Jewish Traders*. Princeton, 1973
idem, *Ha-Temanīm*. Jerusalem, 1983
idem & Friedman, M.A. *India Traders of the Middle Ages*. Brill Leiden, 2008
Hirschberg, H.Z. *A History of the Jews in North Africa*. Vol.1. Leiden, E.J.Brill, 1974
Hourani, A.H. *Minorities in the Arab World*. New York, 1947
Landshut, S. *Jewish Communities in the Muslim Countries of the Middle East*. Connecticut, 1950
idem, *European Naval And Maritime History, 300-1500*. Bloomington, 1985
Lewis, B. *The Jews of Islam*. London, 1981
Lopez, R.S. & Raymond, I.W. *Medieval Trade in the Mediterranean world*. New York, 1955
Margariti, R.E. *Aden & the Indian Ocean Trade*. Chapel Hill, 2007
Mendelssohn, S. *Jews of Asia*. New York, 1920
Mottahedeh, R.P. *Loyalty and Leadership in an Early Islamic Society*. Princeton, 1980
Prawer, J. "Jews, Christians and Muslims in the Mediterranean Area." *Pe'amīm* 45, 1990, pp.5-10
Sassoon, D.S. *A History of the Jews in Baghdad*. Letchworth, 1949
Stillman, N.A. *The Jews of Arab Lands*. Philadelphia, 1979
Tessler, M.A. *Minorities in Retreat*. New York, 1979
Udovitch, A.L. *Partnership and Profit in Medieval Islam*. Princeton, 1970
Ye`or, B. *The Dhimmi*. London, 1985

邦文参考文献

『聖書』（新共同訳）日本聖書協会，1987 年
市川　裕『ユダヤ的知性の系譜』筑波大学哲学・思想学系，1989 年
――――「歴史としてのユダヤ教」『岩波講座宗教 3　宗教史の可能性』所収，岩波書店，2004 年
――――『ユダヤ教の精神構造』東京大学出版会，2004 年
――――『ユダヤ教の歴史』山川出版社，2009 年
岩波講座・東洋思想　第一巻『ユダヤ思想１』岩波書店，1988 年
岩波講座・東洋思想　第二巻『ユダヤ思想２』岩波書店，1988 年
植村邦彦『同化と解放―十九世紀「ユダヤ人問題」論争―』平凡社，1993 年
臼杵　陽（監修）『ディアスポラから世界を読む』明石書店，2009 年
小尾敏夫『ロビイスト』講談社現代新書，1991 年
カステーヨ，E.R.＆カポーン，U.M.『図説・ユダヤ人の 2000 年』（那岐一堯訳）（歴史編，宗教・文化篇）同朋舎出版，1996 年
黒田美代子「イスラーム世界におけるユダヤ人―共存・共生の歴史―」『ユダヤ人とは何か』三友社，1985 年，pp.89-118
小岸　昭『スペインを追われたユダヤ人』人文書院，1992 年
サッスーン，B.『ユダヤ民族史』6 冊，（石田友雄他訳）六興出版，1976-1978 年
サルトル，J.P.『ユダヤ人』岩波新書，1956 年
嶋田英晴「ラビ・ユダヤ教中央集権体制の終焉―10 世紀のイラクを中心に」（『東京大学宗教学年報 XXII』東京大学文学部宗教学研究室　2005）
――――「中世イスラーム圏のユダヤ商人の協同事業」（『東京大学宗教学年報 XXVII』東京大学文学部宗教学研究室　2009）
ジョンソン，P.『ユダヤ人の歴史』（阿川尚之，池田潤，山田恵子訳）（上・下巻）徳間書店，1999 年
スミス，A.D.『ネイションとエスニシティ』（青山靖司・高城和義他訳）名古屋大学出版会，1999 年
――――『選ばれた民』（一條都子訳）青木書店，2007 年
ゾンバルト，W.『ユダヤ人と経済生活』荒地出版社，1994 年
田村愛理『世界史のなかのマイノリティ』（世界史リブレット）山川出版社，1997 年
手島勲矢編著『わかるユダヤ学』日本実業出版社，2002 年
ディモント，M.『ユダヤ人』上下，（藤本和子訳）朝日新聞社，1984 年
ドイッチャー，I『非ユダヤ的ユダヤ人』（鈴木一郎訳）岩波新書，1970 年
トインビー，A.『図説・歴史の研究』（桑原武夫訳）学研，1975 年
マリア・ロサ・メノカル『寛容の文化　ムスリム，ユダヤ人，キリスト教徒のスペイン』（足立孝訳）名古屋大学出版会，2005 年
湯浅赳男『ユダヤ民族経済史』新評論，1991 年
湯川　武「ユダヤ商人と海―ゲニザ文書から」『イスラム世界の人々4―海上民』東洋経済新報社，

1984 年，pp.107-136
イェルシャルミ，Y.H.『ユダヤ人の記憶，ユダヤ人の歴史』（木村光二訳）晶文社，1996 年
歴史学研究会編『ネットワークのなかの地中海』青木書店，1999 年
ワット，W.M.『地中海世界のイスラム』（三木亘訳）筑摩書房，1984 年

＜補遺「ゲニザ文書」について＞

ゲニザ「**גניזה**」（Genizah）とは，ヘブライ文字の書かれた文書や儀礼用具のうち，既に使用されなくなったものを保管しておくためにシナゴーグなどの建物に併設された保管所を指すヘブライ語である。中世のユダヤ社会では，ヘブライ文字で「神」や神名の書かれた紙を破棄しないよう，使用済みの大量の紙がゲニザに貯えられて保存された。この中で，特に 19 世紀末にエジプトのフスタート（オールド・カイロ）のパレスティナ系ベン・エズラ・シナゴーグのゲニザから発見された大量の文書が「カイロ・ゲニザ」と呼ばれ，通常「ゲニザ文書」と言えばこれを指す。

全体で 25 万枚以上にもなるゲニザ文書の原本は，現在イギリス，アメリカ，フランス，ハンガリー，ロシア，イスラエルなどを中心とする世界各地の 19 の図書館及び幾人かの個人によって分散して所有されているが，大半はケンブリッジ大学図書館及びオクスフォード大学の Bodleian Library に所蔵されている。

ゲニザに使用済みの紙を貯蔵する習慣は，エジプトでは 19 世紀に至るまで継続されてきたため，発見された文書の書かれた年代の幅は 9 世紀から 19 世紀までと広いが，その大部分は 11 世紀初めから 13 世紀半ばに集中している。そしてこれらの文書が書かれた場所は西はイベリア半島から東はインドにまで及ぶ。

25 万枚余りの紙の内訳は，礼拝用の詩，宗教書の断片などに代表される文学的文書と，ユダヤ共同体の日常生活について書かれた記録文書に大別されるが，記録文書は全て合わせても（今のところ）2 万枚余りである。記録文書の約半数は公私両面にわたる手紙，商業上の往復書簡であり，以下種々の契約書や婚姻・離婚証書，ラビ法廷の裁判記録，帳簿，計算書などと続く。

文学的文書の大部分がヘブライ語で書かれているのに対し，記録文書の大半はヘブライ文字表記の中世アラビア語で書かれている（Judaeo-Arabic）。ゲニザ文書は，中世ユダヤ社会及びイスラーム世界，また当時の東西交易の様子を解明しようとする社会経済史の分野に大きく貢献する史料としても，今後の更なる研究の進展が待たれている。

Jewish Survival Strategies in the Hebrew Bible

Hideharu SHIMADA

Every people tries to survive, but the Jewish people in particular has struggled to survive. One characteristic of the Jewish people is that they not only try to survive, but also take account of such struggle in order to keep their Jewish identity. This was the destiny of Jewish people since they established a covenant with God to live as a chosen people and made it their mission to realize God's will on earth.

However, their behavior toward Gentiles put their own beliefs before all else and rejected compromises with the majorities into which they would assimilate, often leading to conflicts with their host societies. At the worst, they were massacred and almost exterminated.

There were many crises that Jewish people faced, such as religious conflicts, economic conflicts, political conflicts, racial conflicts, cultural conflicts and environmental changes. This paper is an attempt to show Jewish survival strategies by surveying their strategies for survival that appeared in their scriptures, especially in the Hebrew Bible. Henceforth, I intend to expand into cases of failure to show the whole picture. The results of this investigation will offer tactics for survival for peoples who may possibly face conditions similar to those confronted by the Jewish people.